

手つきと合わせて、その視線の先には先輩の真剣な横顔が。無線ならぬ“無言”の通信がある

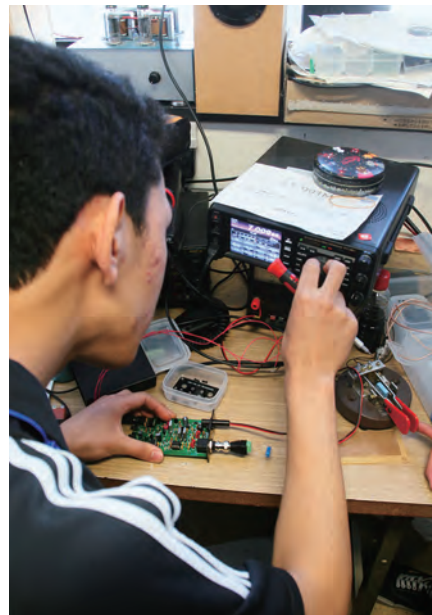


## 見えない電波に接することから 同じ灘校生として、 伝え、感じ合う先輩と後輩

無線のない世の中は考えられない。携帯電話もまさにそう。私たちは日常生活のあらゆる場面で無線にお世話になっている。

「テストは必ず合格する。早く無線機とPCを触って交信してみたい」。7月の資格試験を前にして、攻略本を見ながら話してくれたのは中1の柘田弦也くん。このように、後輩たちはみんな、アマチュア無線資格を取得することには前向きな様子だ。

「部活は生徒の自主的なもの。4つの柱からどれが主流になるのか。あるいは、まったく別の活動になりクラブの名称が変わるのか(笑)。それはこちら楽しみです」とは顧問の小舟康友先生。続けて「どの活動にも彼らは熱心。部活を通じて、知らぬ間に物理などの勉強をしています」と見守る。



## 私学の CLUB ACTIVITY!

### 文化系クラブ 4

# こちら、JR3YYJ! 灘校「アマチュア無線研究部」

生まれたときから携帯電話が当たり前の世界。そんな時代にアマチュア無線を通じ、新しい出会いがある。モールス信号を打ち交信する楽しさ。見えない電波を求め、山野を駆け回る爽快感。きっかけは必ずしも“JR3YYJ”ではなかった。でも、今となっては後輩に伝えたい、引き継ぎたい思いがある。

●灘

<http://www.nada.ac.jp/>



「活動の柱は大きく4つです。そう説明するのは部長で高2になる秋田秀紀くん。部長が最も力を入れているのは文字通りのアマチュア無線交信。通称、ラグチューや遠距離通信(DX)とよばれ「全国コンテスト」にも参加します。無線の飛びやすい小笠原諸島で合宿をし、ヨーロッパと交信したこともあります」と語る。交信した人とはその証明となるQSLカード(交信証明書)を交換する慣習があり、これが嬉しいと笑顔を見せた。活動の2つ目がARDFと呼ばれるもの。こちらはなかなか過酷な競技のようだ。「制限時間内に何個の電波を探し出せるかというオリエンタリングのようなものです」とは、この競技クラブ第一人者・高2の吉川秀儀くん。ARDFのベテランである彼は、2014年に群馬で開かれたアジア大会にも出場。2時間を通し山野を駆け回った。

同クラブの部員は現在27名。高2が13名と最も多いが、中学生も12名を数える。今年度は文化祭のお客様満足度で第4位を獲得した。中1生4名に入部理由を聞くと「電子工作やロボットの派手さ。リコーダーを自動演奏したり……」との返答。そのとおりで、活動の柱、残り2つは「電子工作」と「ロボット」になっている。



こちらは、校舎や周囲の建物の関係でいまいと電波の感度がおもわしくないという灘校の無線アンテナ。クラブ活動は月曜日から金曜日まで、毎日16時から17時30分。中高合わせて27名の部員は、部室以外に教室で電子工作やロボット制作も行う

「個人が今やりたいことをやるクラブです」と部長の秋田くん。そこは、いかにも灘らしい。「ただ……」と続けられた。「電子工作やロボットは入口。そこから無線の面白さを知ってくれたら嬉しいですね」とも。それは部の方針にも現れる。生徒独自で、アマチュア無線免許取得、を入部規約として設定。毎年7月にある資格試験に1回で合格すれば、受験料を部費で支払うことも約束している。さらに、試験後の8月には摩耶山へ無線機を担いで登り一泊。徹夜で交信数を競う「フィールドデコンテスト大会」にも参加し、後輩に楽しさを伝えている。「灘の無線はつながりが悪い(笑)」。と同時に日本は国土に比して無線局の数が異常に多いのが現状。また、いま主流で楽しんでいる方々がよりルールを順守する。するとクリーンな電波でさらに新しい仲間も増えるはずです」部活だけではない。彼らはこの世界の将来を見据えていた。

